

2022 年横浜ナザレン教会・終末主日 (11/20) 礼拝

「伝道とは」

使徒言行録第八章 26 節から 40 節

### 【聖書】

使徒言行録 8:26 さて、主の天使はフィリポに、「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。27 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、28 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。29 すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒にいけ」と言った。30 フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。31 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりますか」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。32 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。

「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。

毛を刈る者の前で黙している小羊のように、

口を開かない。

33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。

だれが、その子孫について語れるだろう。

彼の命は地上から取り去られるからだ。」

34 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか、だれかほかの人についてですか。」35 そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説き起こして、イエスについて福音を告げ知らせた。

36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼(バプテスマ)を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」※38 そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼(バプテスマ)を授けた。39 彼らが水の中から上がると、主の霊がフィリポを連れ去った。宦官はもはやフィリポの姿を見なかったが、喜びに溢れて旅を続けた。40 フィリポはアゾトに姿を現した。そして、すべての町を巡りながら福音を告げ知らせ、カイサリアまで行った。

## 1 伝道は神の御業

使徒言行録には、主イエス・キリストの弟子たちが主を宣べ伝える様子が描かれています。私たち、信仰者や、礼拝に集められた者達には身近な話。読む度に新しい発見があり、慰められ、励まされます。今日の聖書もまさにそのような物語で、繰り返し聞いていたい心

持となります。ですが、今日の物語では、私たちが会ったこともない主の天使や、目に見えない主の霊が出てきて、一読しただけでは、身近に感じないかもしれません。主の霊や天使が出て来るには、特別な意味があります。フィリポの伝道を導く天使や霊の出現は、イエス・キリストを宣べ伝える伝道は、神の御業である、ということを表しているのです。目に見えない神への信仰は、人の力で与える事は出来ません。神が働いてくださるからこそ信仰者が起こされるのです。信仰とはまさに神の奇蹟の御業です。

ある隠退牧師が、次のような話をしました。彼が仕えた教会では、礼拝堂が古くなり、建て替える必要が出てきました。会堂建築委員会が組織され、最初に何をやったかという、教会や教会がある町の沢山のデータをあちこちから集め、コンピューターに入力した、そして、今後、教会員はどれくらいになり、献金はどれくらい集まるか、シュミレーションしました。その結果に基づいて、新会堂建築の予算を立てたそうです。しかし、シュミレーションは外れました。会堂を建て変えた後、予想を上回る会衆が集まったのです。どんなに優れたプログラムを作っても、伝道の結果は決してコンピューターで予想できるものではないのだ、としみじみ思った、とその引退牧師は語っていました。その通りだと思います。礼拝出席者数が減っている私たちの教会は、間違いなく存亡の危機にあります。コンピューターでシュミレーションしたなら、数年後には教会はなくなる、という結論が出るでしょう。

しかし、恐れることはないし、諦めることもありません。私たちが、「伝道とは何か」をしっかりと弁え、具体的な方策を神に祈り求め、共に力を合わせて実践していけば、必ず神は答えてくださいます。奇跡を起こしてください。伝道は神の御業だからです。横浜ナザレン教会を神の御業に用いて頂くためにも、私たちは伝道とは何か、きちんと聖書から聞き取る必要があるのです。今日の聖書には、教会の伝道の本質がはっきりと描かれています。それを、ご一緒に見ていきます。

## 2 寂しい道

サマリアで伝道していたフィリポは、主のみ使いから命令を受けます、「**ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け**」。そこは、寂しい道、26 節の「寂しい」と訳されている単語は、普通は「荒野」とか「砂漠」等を指す言葉です。伝道は、人が多い場所で行うもの、人がほとんどいない荒れ野で伝道することはありえません。しかし、この一見不合理な言葉は、もうそれは神からの命令としか思えないような形でフィリポに決断を迫ったのだと思います。彼は、「神が行けと仰っている。何かあるに違いない」と出かけて行きます。

そこで、彼が出会ったのは、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産を管理している宦官でした。ここでいうエチオピアは、現在のエチオピアとは異なります。スーダンあたりに位置していた豊かに栄えた王国だと言われています。この国は、何代もの間、女王が支配していました。「カンダケ」というのは女王の名前ではありません、称号です。エジプトの王が「ファラオ」という称号と呼ばれていたように、エチオピア女王は、「カンダケ」と呼ば

れていたのです。

古代世界には、「宦官」といわれる人々がいた国がありました。去勢された男性です。宮廷に仕える男たちが、王の一族である女性と性的な過ちを犯さないように、と去勢されたのです。性に関することは、人間の最も根本的なものの一つ、神が与えて下さったもの。それを、権力者の都合で奪い去るとするのは、酷いことです。宦官制度は人を「もの扱い」する非人間的な制度と言ってよいでしょう。宦官の中には、王の家庭の奥深くまで立ち入ることができるので、君主から厚い信頼を得て、大きな権力を持つ者も現れます。人びとは表面的には権力者である宦官を尊重していたかもしれない。しかし、本心では、一人前の人間と見なさず、侮り、蔑んでいました。

この宦官もそのような一人であったでしょう。彼は、豊かなエチオピア帝国の高官であり、ギリシャ人達が憧れる、立派で堂々とした黒人でした。現代世界のような黒人を蔑視する風潮は古代にはありません。にも拘わらず、彼は、いつ滅んでもおかしくないような弱小民族イスラエルが信じる神を敬っており、エルサレム神殿に参拝するほどでした。しかし、宦官は、イスラエルの信仰共同体に迎え入れられることはありません。去勢された男は、神の民にはなれない、という律法があるからです。彼には権力も富もあり、女王も人々も彼を重んじている。ですが、それは彼の能力を重宝しているだけ。自分の存在をそのまま受け入れてくれる者は、誰一人としていない。やりきれない思いを抱え、孤独に苦しんでいる人間の姿があります。「そこは寂しい道であった」緑もなく水もなくひとけも途絶えた道は、まさしく彼の道でした。孤独の中に沈んでいる魂、飢え渴いた魂をもてあまして歩む道です。

### 3 卑しめられた救い主

満たされない思いを抱えて馬車に乗った宦官は、奴隷にイザヤ書第五十三章を朗読させていました。何故、宦官はイザヤ書第五十三章を選んだのでしょうか。そこにある次の言葉に惹かれたからではないか、と思います。「卑しめられて、その裁きも行われなかった。だが、その子孫について語れるだろう。」彼も又卑しめられており、子孫を持つことはできません。彼は、この言葉に自分の姿を見出す思いがしたのではないのでしょうか。「預言者の語る『彼』とは一体誰の事なのか？」深く物思いに沈んでいた宦官は、不意に聞こえた声で我に返ります。「読んでいることがお分かりになりますか」

一方、サマリアを後にして南に下り、ひとけのない街道に出たフィリポ、たった一台、ガタゴト走る馬車を見つけます。その途端、「あの馬車に寄り添って行くべきだ」という声が、自分の中に響くのを聴きました。彼は馬車に合わせて走り出さずにはおられません。近づいてみると、イザヤ書第五十三章を朗読する声が聞こえてきます。思わず話しかけていました。「読んでいることがお分かりになりますか」

宦官が、声の先に目をやると、一人の旅人が馬車の横について走っています。旅の装いの質素な身なりの男。エルサレム神殿にいた大祭司たちの荘厳で煌びやかな服装でもなけ

れば、律法学者たちのように訳知り顔でもありません。しかし、エルサレムでは、ついに聞くことができなかつた何かをフィリポのその声に感じました。そこで宦官は答えます。「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりますか」。早速、体をずらして場所を開け、フィリポを座席に引き上げ横に座させます。そして彼の言うことを一言一句聞き漏らさないようにと、耳をそばだてたのです。

フィリポは、語ります。私たち人間は、神によって、神に似せて造られました。神を神として互いに大切に思って生きるためです。しかし、人間は自分も神になりたい、と考えて、神との関係を壊したのです。神は完全な正義の方ですから、この人間の罪を、見過ごすわけにはいきません。しかし、特別にご自身に似せて造った人間を滅ぼすことを、神はとてつらく悲しく思われた、そこで、神は、人が思いもよらぬ計画をお建てになります。御自身が最も愛し信頼する独り子に人間の罪を全て肩代わりさせて十字架に裁く、そうして、新しく確かな関係を人間と結び直すというのです。その証として、御子を三日目に永遠の命へと甦らせる。神はそのことをイエス・キリストにおいて実行しました。宦官が読んでいたイザヤ書第53章は、このイエス・キリストの十字架の贖いを預言したものであり、主イエスの十字架と復活によって成就しました。

言い換えれば、すべての人は、一人の例外もなく、神の御子が命を投げ出すほどに尊い、それが、イエス・キリストの十字架と復活を通して神が私たちに明かにされたことです。私たちの背きの罪は、主の十字架によって赦された、私たちは罪の縄目から解放され神の子として生きることができる、フィリポは、このイエス・キリストによってもたらされたよい知らせ、福音を宦官に告げたのです。

人々から一人前の人間とは見なされない宦官の自分をも深く愛してくださる方がいる、自分にこの神の愛を伝える為、主イエスは、誰よりも低くなり、卑しくなってくださいました。主は、人に蔑まれる悲しみも痛みも、全て知っておられる救い主、誰にも分ってもらえない、この孤独を分かってください、共に弱さを負ってください方。深い淵に座り込む自分の所まで降りて来て、神の御許へと引き上げてくださる救い主。真の救い主と出会った宦官の喜びは、いかばかりであったでしょうか。

## 4 洗礼

丁度、フィリポが語り終えた頃、馬車は、涸れた河のそばを通りかかりました。雨季には豊かな水が川となって流れる場所。しかし、不思議なことに、雨季でもないのに、豊かな水が流れています。これを見た宦官は、フィリポに洗礼を願い出ます。フィリポもこれを受け入れ、共に水の中に入って行きました。当時の洗礼は流れる水の中にぎぶりと沈むもの。洗礼を意味する「バプテスマ」は、「水の中に沈む」という意味の言葉です。それは「死」を指し示しています。洗礼とは、一度、死ぬということ。神とは関係なく生きていた古い自分が死んで、神としっかりと結びついた新しい自分に生まれ変わる事。宦官は、フィリポと共に古い自分

に死に、神の民である新しい自分に生まれ変わったのです、

しかし、不思議なことに、水から上がると、そこにフィリポの姿はありませんでした。聖霊が彼を、アソド、旧約ではアシュドの言う外国人の町までかささらって行ったのです。ここでも、ルカは、伝道の主体は、人間ではなく神である、と語っています。

しかし、宦官は喜びに溢れて旅を続けました。直訳すれば、「彼は喜びに溢れる彼の道を行った」。自身の存在そのものを喜んでくださる救い主がおられる、その方の導きによって生きていくことができる、寂しく砂をかむような彼の道は、生きる喜びに溢れる道へと変わっていました。神によって自身が変わえられれば、世界が変わるのです。

## 5 フィリポの成長

フィリポが宦官にイエス・キリストを伝える様子を見てきました。同じフィリポの伝道ですが、サマリアでの伝道とは随分と違います。サマリアでのフィリポは、不思議な業や徴、つまり奇蹟を行って伝道し、人々に洗礼を授けました。しかし、それでは聖霊は降らなかつた。一方、宦官へは聖書のみ言葉からイエス・キリストを伝えました、そして、彼と一緒に水に浸かり、共に一度死に、共に新しく生まれる、という洗礼を授けます。宦官が喜びに溢れて自分の道を進んだ、という事から、彼に聖霊が降ってくださったことは明らかです。フィリポが宦官に伝道する様子には、宦官への深い愛が現れているようです。神に全てを委ねて伝道したフィリポは、出会った相手を愛する者へと変えられていたのではないのでしょうか。

伝道は神の御業です。それは真実です。しかし、神のみ旨に従い、働く者がいなければ、伝道する事はできません。空気感染する伝染病のように神のみ言葉だけが広がるわけではないのです。告げ知らせる者を必要とする、神は、ご自身の伝道の業を、私たち人間を用いてなされるのです。

不思議なことです。全知全能の御神が、どうしてそんな回りくどいことをなさるのでしょようか。全てご自身で行うほうが、よほど効率的でしょうに。しかし、神は敢えて欠けがあり限界がある私たちを用いようとされます。何故か。それは、伝道する者達を、伝道を通じて、成長させる為ではないのでしょうか。伝道には難しいことが沢山あります。ですが、その様々な困難を通じてこそ、神は働いてくださいます。私たちは伝道する事で、神に深くより頼まざるを得なくなります。そうして、より深く高く大きく広く神を知り、自分を知り、人を知り、人生を知る。そして、より深く高く大きく広く神を愛し人を愛し自分を愛し人生を愛するよう変えて頂くのです。

だから、伝道は、どこを切っても、どこから見ても、神の愛の業です。神の愛の業である以上、報いをあてにして行うことではありません。人からの見返りを求めるなら、それはビジネス。教会がビジネスを行わなくても、この世の中にビジネスは溢れかえっています。一方、神の愛の業である伝道は、人からの報いを期待しません。主イエスを見てもそれは明らか。主ご自身は、侮られ蔑まれた十字架に至るまで、徹底的にこの世に奉仕されました。御自身の

ためでしょうか。違います。私たち一人一人のためです。

現代は、効率第一の世界、神とは関係なく人間が主役の世界です。何等かの能力がなければ存在価値がない、人びとは無意識のうちにこの呪縛にがんじがらめとなっています。「使えない奴」という言葉で人を役立たずと切り捨てるのが、この世界では日常茶飯事。なんと多くの人びとがエチオピアの宦官のように、寂しい魂を抱えていることでしょうか。私たちは、そんな神を知らない世界で飢え渴く人々にイエス・キリストを宣べ伝えるのです。「あなたはあなたであるだけで、御子が命を投げ出されるほどに尊い。この方を信じて生きれば、自分の命を喜ぶことができる」と大声で告げ知らせるのです。飢え渴いた魂が、キリスト・イエスによって潤され、深いところで、自分の命、他者の命を喜んで生きるようになる為に。その為に、私たちは、他の方々よりもちょっとだけ早くキリスト者とされたのです。ですから、伝道の目的は、教会の維持ではありません。教会の力が増すことでもない。それは、伝道の結果に過ぎないのです。目的と結果を取り違えてはなりません。

主イエス・キリストに倣い、神さまに全てを委ねて用いていただき、この世を愛し、主イエス・キリストを宣べ伝える事こそ、伝道です。この世に奉仕する業、愛の業。このような業へと私たちを召し出してくださり、神の子へと成長させてくださる天の父なる御神を賛美せずにはおられません。